

摯に向き合っていかなければならないのである。

堀畑裕之著

『言葉の服

——おしゃれと気づきの哲学』

トランスビュー、2019 年刊

285 頁、2700 円+税

国際ファッション専門職大学

大西光恵

## 1 本書の概観

本書は、大学院で哲学を学び、そこから服飾の世界に転じた後、「日本の美意識が通底する新しい服の創造」をコンセプトとしたブランド「matohu（まとう）」を関口真希子とともに設立したファッションデザイナーである堀畑裕之が書いた哲学的随筆である。構成は次の通りである。

第一章 気づきを生かす

第二章 「日本の眼」で見つめる

第三章 日本人のおしゃれ

第四章 出会いを生かす——物と人

第五章 日々の哲学

第六章 対話篇——哲学者 鷺田清一と京都を歩く

## 2 本書の内容と特徴

冒頭において、著者は「私たちは今、どのような服を着ているのか。服とは何から生まれるのか。」ということ問いかけ、私たち自身の日々の生活を見つめ直すことにより、いつしか忘れてしまった「日本の美意識」に気づくことができるのではないかという問題を提起している。

第一章の「はじめに『言葉』がある」のご

とく、著者の立ち上げた「matohu（まとう）」の服飾ブランドは、「見立て」「やつし」「ほのか」「はるか」などに具現されるように、新作のショーの発表前に「言葉」を先に届けることにより、他のブランドと一線を画している。

日本古来から存する美しい言葉と服が、どのように融合していくのか、日本古来からの「言葉」の美しさと服とのつながりの深さについて改めて考えさせられる。

長い歴史を通して洗練されてきた「言葉」の美しさが、本書を一貫して流れており、それらが衣服のデザインとどのように関連していくのかという紹介も多彩であり、ファッションと言葉のあり方について知らず知らずの内に考えさせられ、魅了されていく。

第二章「日本の眼で見つめる」では、季節の色と言葉のデザインとして「かさね」が紹介されている。日本の服飾デザインの始まりの原点の一つとしての平安時代の「かさね襲色目」の「衣の色を幾重にも重ねる」手法が、十二単の色彩デザインに見られることを明示している。桜の季節であれば、匂い立つような桜色のグラデーションが浮かび上がる「桜のかさね」として、身近な季節の自然の色を採り入れる手法は、季節を敏感に捉えて描写していく歳時記的手法〔中洲 2007: 17〕とよく似ている。季節に応じた感性や、日本古来の色を服飾のデザインに積極的に取り入れ、活かしていく手腕の見事さに魅了され、圧倒される。

「ふきよせ」——足元の宝物——では、9年間の間に少しずつ残ってきた生地を切り継いでコラージュしてきた服がコレクションのショーのフィナーレとして登場する経緯が紹介されている。風に吹き寄せられて集まった街路樹の落ち葉の色や形の美しい風情から着想を得て、裁断後に出てくるハギレや短い反物に、吹き寄せる落ち葉のごとく、意図しない美しさを醸し出していく姿に魅了される。その他にも、「あわい」「尽くし」「おぼ

ろ」など、柳宗悦がかつて病床で書いた論考、『日本の眼』（1957年）の思索を通して、日本の美意識をさらに拡充した観点から豊かな「言葉」と服を紡ぎ出している。

「かろみ」では、茶の湯や、侘び茶に触れつつ論じている。「エフォートレス（「努力のいらない）」というスタイルが最近話題になっているが、軽やかなおしゃれの根底には、芭蕉の説く「軽み」のように心を尽くして向き合う努力を惜しまない姿勢こそが、実は重要であることを示唆している。芭蕉や世阿弥などの事例や言葉をさりげなくファッションと切り結ばせていくところに、著者ならではの文学的センスが感じられる。

第三章では、土方歳三の「いき」、中原中也の「憧憬」、高村智恵子の「素」、宮沢賢治の「田園」など、それぞれの著名人の愛用したファッションのルーツを紐解いている。「憧憬」では、普段、私たちがよく目にする山高帽子を被った中原中也の写真の背景に憧れていたアルチュール・ランボオの影響があったことを指摘している。日本人と洋服の始まりを考える際に、幕末、大正時代の洋服に当時流行していた西欧のファッションが投影されていたことを知ることは興味深く、その時代に活躍した人々の姿をまた違った角度から観ることができる。

第四章、五章では、物と人の出会いを生かすとはどういうことか、日々の哲学的な物の見方について論じている。九谷焼や銘仙などの手仕事や服や言葉が持っている面白みが、日常生活を楽しむ大きなヒントになることを論じている。

第六章は、著者と同じ哲学者である鷺田清一と京都を散策しながらの対談がまとめられている。対談の中で、鷺田は言葉と服の類似点について語り、「服が人の振る舞いを編むように、言葉が人の思考や感情を編んでいく」と論じている。服と言葉の密接な関わりが如実に表現されている。

### 3 展望と考察

著者は、対談の中において鷺田に「人に寄り添うような服を作りたい」と語り、服を通してコミュニケーションのあり方をこれからも探っていきたいと述べている。服が消費財として出回る現代社会において、「人に寄り添う服」、「服を通してコミュニケーションのあり方を探る」という視点は、ファッション業界において今後ますます求められる重要な観点になっていくと思われる。

教育学者の片岡徳雄は、感性とは「価値あるものに気づく感覚」と述べている[片岡 1990: 19]。つまり、感性を豊かにすると、物事の感じ方や考え方、見方を広げ、深めていき、価値あるものに気づき、より質の高いものにしていくこととも言える。自分の感性を働かせて言葉を深く感じとり、言葉の様々な楽しさや美しさに気付くことが、言葉の感覚を豊かにしていくことにつながる。価値あるものに向かう過程には、言葉との出会いがある。様々な自然や生活や文化と交感することを通して、言葉をより深く、鋭く感じていくことが可能になる。

本書の「服も言葉を発している」という新たな提言を受けるなら、私たちはより一層、価値あるものに気づく感性を豊かにし、言葉に対して敏感になっていくことが求められるであろう。今後、服飾に関連する多くの分野においても、私たち日本人が培ってきた日本の美意識や、衣服と文化と言葉の関わりを大切にしていくという本書の視座の拡充を期待したい。

#### <参考文献>

- 片岡徳雄 1990『子どもの感性を育む』日本放送出版協会。  
中刈正堯 2007『ことば学びの放射線——「歳時記」「風土記」のこころ』三省堂。